

コウルリッジとドイツ文学(3)レッシングと コウルリッジ

Takayama, Nobuo / 高山, 信雄

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

61

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

1987-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005226>

コウルリツジとドイツ文学 (三)

— レッシングとコウルリツジ —

一、はじめに

高山 信雄

コウルリツジがドイツ滞在中に、もっとも興味を覚えて懸命に資料集めをした作家は、レッシングであった。

レッシングは、いわゆるドイツ啓蒙主義文学の完成者であつて、ドイツの近代文学の發達にたいへん貢献した文人である。しかし、コウルリツジがドイツへ渡つた一七九八年にはすでに世になく、彼はドイツでその足跡を偲んだのである。コウルリツジはレッシングのことはすでに渡独前から知っていたけれど、ドイツに滞在して、その偉大さをさらに認識し、ますます傾倒することになつたのであつた。そしてついに、レッシングについての伝記を畫こうと計畫するに至るのである。

コウルリツジはレッシングを非常に高く評価していたようである。一つには、レッシングがギリシア古典に造詣が深く、しかもそれを彼の時代のドイツにふさわしいものとして演劇に取り入れたことがあげられよう。そのうえ、アリストテレスの『詩学』を新たな視点から再考して、フランス古典劇が追従していた三一一致の法則は『詩学』の誤つた解釈から生じたものであるとし、シェイクスピア劇こそ近代のドイツ精神に適合するものであると考へた。コウルリツジのシェイクスピアに向けられた批評精神は、実のところドイツ滞在中の一八世紀末にレッシングの書

物から示唆を受けたと思われる。したがって、シュレーゲル以前に、すでにその批評の基本的傾向を、コウルリッジはレッシングから受け継いでいたように思われる。

コウルリッジが受けたレッシングの影響は、これにとどまらない。『賢者ナータン』に見られるような、諸々の宗教を超越した、真に人間的な宗教的心情こそ、すなわち完全な宗教であるという見解は、想像力をもって宗教と哲学を融合しようとしたコウルリッジには非常に興味ある思想であった。また、『サラ・サムブソン嬢』に見られるような、一般市民を主人公とする散文の演劇は、まさに演劇史上画期的なものであった。さらに、『ラオコーン』に見られる、空間芸術としての造形美術と時間芸術としての文学との相違は、コウルリッジの美学思想に大きな影響を与えたと考えられる。

数多いドイツ啓蒙主義の作家のうちで、コウルリッジはレッシングにもっとも関心をもったことは、右のような理由から故なきことではない。コウルリッジがドイツに滞在していた時期には、もはや啓蒙期の作家の活動は弱まり、比較的短いシュトルム・ウント・ドラングの時代を経て古典主義の時代へとすでに移行していたのであるが、レッシングの撤いた種は、多くの作家たちによって、大きな花を開いていたのである。コウルリッジは、そうした状況のドイツにあって、この作家に一層の敬意と親しみを寄せるのであった。

一、レッシングへの憧れ

コウルリッジがレッシングについて初めて言及しているのは、一七九六年四月一日付のベンジャミン・フラワー宛の手紙の中である。ベンジャミン・フラワーはケンブリッジで雑誌『ケンブリッジ・インテリジェンサー』を編集している知人である。この手紙の中で、彼はレッシングに触れ、「もっとも恐るべき反キリスト教的な人物は、『エミリア・ガロッチィ』の作家レッシングです」と述べている。そしてさらに、『無名作家の断章』について記し、これはヴォルテールの機智とヒュームの巧妙さとラードナーの深い学識とを混ぜあわせたようなものであると考へ、一時はこれを翻訳しようとする思⁽¹⁾った。

一七九八年九月二〇日、コウルリッジはワーズワースと共にクロップシュトゥックに会ったとき、クロップシュトゥックの家でレッシングの肖像画を見た。コウルリッジが見たところでは、そこに描かれたレッシングは、目がたいへん大きくはつきりしていて、彼自身の日と同じように思えた。顔のあごの部分や鼻の部分は、気高さや感受性の豊かな表情をたたえていた。額には深みや重みや思慮分別の豊かさは認められなかったけれど、顔全体から敏捷で官能的な感じを受けた。そして実生活の面よりも理想世界つまり形而上学的な面での鋭さを感じさせた。⁽²⁾残念ながらレッシングは、コウルリッジの渡独の一七年前の一七八一年に五二歳ですでに他界していた。レッシングより五歳年上のクロップシュトゥックには会えたけれど、レッシング本人には会うすべはなかった。しかしながら、レッシングを知る人々とは語り合う機会をもつことができた。

クロップシュトゥック邸を訪れたときに見たレッシングの肖像画は、コウルリッジに多大の感銘を与えたように思われる。というのは、彼はこのときの印象をトーマス・プールの宛てた手紙など、多くのものに書いてあるからである。この手紙では、レッシングは男性用のかつらをつけている状態で描かれてるけれど、それが顔の表情を著しく損ねているように思えた」と記している。また『備忘録』の三三七にも、額には理解力は見られないけれど、大きな目と形のよい口をした人物として描かれていると記し、この絵を素晴らしい絵画であると述べている。同じく『備忘録』の三三九でも、九月二一日の四時ごろクロップシュトゥック家を訪問した折に見たレッシングの肖像について記している。そして、先に述べたような見解のほか、かつらについて言及し、クロップシュトゥックもかつらをつけているけれど、それは彼の表情を著しく醜くしていると述べ、当時の著名人たちがかつらをつけていることに批判の目を向けている。レッシングの肖像画については、これとまったく同じことが一八〇九年一月二七日発行の『友』第一六号の中でも述べられている。⁽³⁾

コウルリッジは、さらにこのレッシングの肖像画の印象を、『文学評伝』の付録につけた「牧神の書簡」の中でも繰り返し返している。ここで彼は、レッシングの作品は目下彼自身が賞賛的としてあるものであることを述べている。したがってこれが書かれたころ彼はレッシングに関心をもっていただけのものと思われる。この「牧神の書簡」は

『文学評伝』の執筆時に同時に書かれたものではなく、一七九八年の渡独時代の書簡が中心となっているので、この当時のレッシングへの感情を反映しているものと思われる。そして、一八一五・六年ごろの『文学評伝』の執筆時にも同じ感情が継続していたからこそ、その当時の友人に宛てた書簡を付録につけたのであろう。したがって、レッシングへの敬意と関心は、長い間続いていたといえる。

「牧神の書簡」に述べられていることは、いずれも一七九八年のトーマス・プールやベンジャミン・フラワーに宛てたものと、内容的にはほとんど同じである。彼自身の言葉によれば、このとき彼はレッシングについては名前しか知らなかったというが、これは謙遜で、ドイツ演劇界に画期的な衝撃を与えたこの作家の作品も、多少は読んでいたことであらうし、また、ドイツへ来て彼の評判を聞いて、その作品を読みたいという衝動に駆られていたことであらう。

コウルリッジはまた、「牧神の書簡」の三つ目の手紙にもレッシングに関する言及をしており、彼がドイツ最初の真の劇作家であるとクロップシュトックが述べていると記している。コウルリッジはここで『賢者ナータン』について意見を言っているので、⁽⁶⁾すでに読んだことがあるのであろう。

このように、ドイツ渡航後にもなく会ったクロップシュトックの家を見たレッシングの肖像画は、実に幾個所にも引用されているのであるから、それだけ印象が強烈だったということを裏付けるものであろう。憶れているレッシングには、すでに会うことは不可解であったけれど、この肖像画がまさに彼に代わって語りかけたのであった。ドイツでの留学も終り、ゲッティンゲンから帰途に着く際に、コウルリッジはレッシングがかつて図書館長をやっていたボルフェンビュッテルを通って行くと記した手紙をトーマス・プールに出している。それは一七九九年五月一九日のことであった。彼はボルフェンビュッテルでレッシングについての情報を手に入れることができるかも知れないと考えたのである。そのときの彼の心情からすると、このままこの町に寄らずに帰国するのは罪を犯すことになるように思えたのであった。⁽⁷⁾

『備忘録』の記録によれば、五月二八日にボルフェンビュッテルに到着したらしい。⁽⁸⁾そこではE・T・ランガー

という人がレッシングの後を継いでいたが、コウルリッジたちが手紙で問い合わせたところ、図書館は二時に開館するという返事だったので、コウルリッジはランガーと会ってレッシングに関する何か有益な情報を聞けるだろうと期待していた。ところが、ランガーは現われなかったため、コウルリッジは失望した。⁽⁹⁾しかし、ボッフエンビュッテルの図書館では、レッシングに関するさまざまな知識を得たようである。『備忘録』の四五〇には、その図書館で、レッシングの記念碑を見て、その四角い柱状の記念碑の面に書かれていた文字を写し取っている。それには、こう書かれてあった。

賢人にして 詩人

ドイツの 誇り

かつて

ミューズと その友人たちの

寵愛を 受けた人

そして、角柱の別の面にもこう書かれてあった。

その人の ために

この記念碑は 建てられた

数人の

感謝を 捧げる

同時代の 人々によって

一七九五⁽¹⁰⁾年

このヴォルフエンビュッテルの図書館員は、コウルリッジに親切にいろいろと教えてくれた。それによると、レッシングの記念碑は、以前は図書館の庭に建てられていたものを、図書館の改修工事の際に図書館の入口にそのままの状態に移されたのであった。

コウルリッジはドイツ滞在中にたくさんの書物を買ひ、それを箱につめてイギリスに持ち帰った。その中には、レッシングの伝記に関する本や資料も大分あったはずである。彼はその書物を入れた荷物のことをたいへん気にしていたが、それは、彼にとって非常に大切な収集品だったからであり、その箱の上にレッシングの魂が飛び回り、ミネジנגガーたちがその箱の後を飛んでいと述べていて、レッシングへの愛着を示している。⁽¹¹⁾

こうして、コウルリッジのレッシングへの関心はますます高まっていくことになったのである。彼のレッシングへの関心は、ドイツ滞在時に非常に高まったけれど、哲学的・美学的思考を深める一八〇九年以降にも、さらに強い関心を示すことになる。そのことは、書簡や『備忘録』などに残された記録によって明らかである。

三、幻のレッシング評伝

コウルリッジは渡独前にはレッシングの伝記を書くこととは思っていなかったようであるが、ドイツへ来てレッシングに関わる事物に触れると、その卓越した知性と革新的な気風にすっかり惚れ込み、この文人の伝記を書いてみたくなった。もちろんイギリスではそれまでそうしたことを試みたという話は聞かない。そこで彼は、このドイツ最初の近代的感觉をもった劇作家であり最後の啓蒙思想家でもあるレッシングを、イギリスに紹介しようとしたのであった。

レッシングの伝記についての最初の言及は、一七九九年一月四日付のトーマス・プール宛の手紙でなされている。

……僕はその作品を書くことを考えています。——そして、ほかの仕事に関するあらゆる迷いを断固として排除しています！——それは僕の心の病なのです。——……僕はその病に気づいています。そこでこれから三ヶ月の

間、その病を癒すことができなくても、少なくともその治療のための手術は見合わせるでしょう。この作品は『レッスングの生涯』と題するものです。——その作品は、ドイツ文学の興隆と、現在の状態におけるドイツ文学の真の姿を織り込んだものです。——僕はすでに三冊の異なる伝記本をもとに、年代ごとに分けられた多少の伝記を書いています。——そして、ゲッティンゲンへ行つたならば、彼の作品が書かれた年代に従つて、それらの作品を徹底的に読むつもりですし、それらの作品が誘因となつた宗教上および文学上の諸々の論争のことも調べるつもりです。

実際に、この時期のコウルリッジはラッツブルクにいて、ドイツ語に磨きをかけていたけれど、ひまさえあればドイツ語で書かれたレッスングの伝記を読んで、大切な部分を書き留めていたようである。『備忘録』のこのころの記録には、レッスングに関係あるものが多く残っている。とりわけ通し番号三七七には、レッスングの生涯の一部が、長々と書き留められている。

この記録には、レッスングの祖先からゴットホルト・エフライム・レッスング、つまり主人公のレッスングに至るまでの家系が最初に記されている。そしてそのあとに、レッスングの生い立ちが述べられている。続いて概括的に彼の死に至るまでの足跡が記されている。これはレッスングの生涯の要点のみを記したものである。彼はこれをもとに、相当な分量の伝記を書こうと考えていたらしい。

コウルリッジがこれを書いたとき参考にした底本は三種類あると自ら述べているが、そのうちの一つは、ヨハン・フリードリッヒ・シンクの『ゴットホルト・エフライム・レッスングの特質』と題する本であり、他の一冊はK・G・レッスングが一七九三年に著わした四〇〇ページに及ぶ伝記らしいが、もう一冊は明らかでない。

コウルリッジはこの年の二月一二日にゲッティンゲンへ着いた。そして六月二四日までここで過ごした。ゲッティンゲンでレッスングに関する資料をどのくらい集めたかは、詳らかではない。しかし四月六日付のトーマス・プーレル宛の手紙では、こう述べている。

僕自身のことについて言えば、実のところまったく多忙です！——僕は数人の教授の授業に出席して、多くの種類の知識を得つつあります。⁽¹⁵⁾しかし僕は相変らずレッシングにへばりついていきます——この主題はますます興味深いものとなっています……

コウルリッジはこの手紙でゲッティングへ来てからもレッシングの伝記についてますます関心をもっていると述べているが、集めるべき資料がまだ沢山あるとも考えている。彼は現在手持ちの資料およびこれから手に入れる資料によって、四つ折り本ができるであろうと述べている。⁽¹⁶⁾

同年五月二一日付のジョサイア・ウェッジウッド宛の手紙において、ドイツでこれまで彼自身が行なってきた活動について振り返って、その主なものを列挙している。

僕はいったいドイツで何をしたのでしょうか？——まず、高地ドイツ語と低地ドイツ語を学びました。両方とも読めるようになったし、高地ドイツ語は流暢に話せるようになりました。でもそれは、僕と話すドイツ人にとつてはわかり難いものであるに違いありません。つまり僕は、単語や熟語を充分に覚え、それらを適切に組み立てられるようになったのですが、発音はひどいものです。——第二に、古代ドイツ語、古代フランク語、スワビ語を読むことができます。——第三に、生理学・解剖学・博物学の授業にはいつも出席して、これらの科目を理解しようと努めました。——第四に、レッシングより前の時代のドイツ文学史について本を読み、資料を集めました。——そして第五に、レッシングに関する膨大な資料を集めました。それはこれまでに出版されたひどく単調で不満足な伝記によるものと、個人的に知り会った二人のレッシングの友人によるものです。⁽¹⁷⁾……

コウルリッジは、この手紙において、レッシングの伝記を選んだ理由に触れ、この伝記本によって世に知られることも、作家として重要なことだとも考えていたようである。そこでゲッティングでは、レッシングが関与して

いるあらゆる論争について調べ、さらにレッシング以前の詩人たちの作品を読んでいると述べている。⁽¹⁸⁾これらの本はコウルリッジには手に入らないか買う余裕のないものばかりで、もっぱら図書館を利用して読んでいたようである。

一七九九年二月二四日付のサウジー宛の手紙では、ロンドンを去ったらずぐにレッシングの生涯の執筆に取りかかることと記している。⁽¹⁹⁾したがってドイツから帰国した年のクリスマス・イヴには、まだレッシングの生涯について本番の執筆はしていなかったのであった。

翌一八〇〇年一月二日付のウエッジウッド宛の手紙では、四月には大作である『レッシングの生涯』に戻ることが述べられている。

この年の七月二四日にジョサイア・ウエッジウッドに宛てた手紙では、いまレッシングの生涯についての序文を書いていると述べている。彼はクリスマスまでには印刷屋へ原稿を入れるつもりでいたようである。⁽²⁰⁾つまりこのときの予定としては、序文が最初に出版されるはずであった。

そして一〇月九日のハンフリー・デイヴィ宛の手紙では、資金が許せばすぐに取りかかりたい作品は『レッシングの生涯』と詩に関する論文であるが、後者の方に一層関心をもっていると述べていて、前者についての関心がやや薄れてきたことを暗示している。⁽²¹⁾

コウルリッジは、レッシングの伝記を計画しているうち、レッシング以前のドイツ文学者にも大きな関心をもつようになり、やがてドイツ文学を通史的に見ようとする考えに変わってきた時期があった。レッシングを、ドイツ文学史上の単なる点とは考えずに、継時的に続くドイツ文学者の思想との相互関係から見ようとするのである。そこで彼は、レッシングを含めた総合的なドイツ文学史を書こうと考えていたようである。

一八一六年八月三一日付のトーマス・ブリージーという書籍商に宛てた手紙において、ドイツ文学史を次のように分けている。

一、オットフリートからミンネンガーとマイスター・ジンガーまで。

二、ハンス・ザックスからオーピッツまで。

三、ルーター等からライブニッツやヴォルフまでの神学と形而上学。それに、一般受けのする折衷主義哲学から
レッシングとゲエッツの論争まで。

ここまでがいわば序説的段階で、これから個々の作家について論じていく予定のようであった。その最初はクロック
プシュトックであつて短い伝記的なものを加えるつもりであつた。彼の目的は、ドイツ文学について知識人たちが
もっている無知と偏見を除くためであるという。⁽²²⁾

コウルリッジがレッシングの生涯について書こうと思つた背景には、レッシングの生き方に対する敬意と同情の
念があつたからであらう。レッシングはコウルリッジと同様に、牧師の子として一七二九年一月二二日にザクセン
のカーメントに生まれた。そして、コウルリッジと同様に慈善学校の世話になつた。それはマイセンにある聖アフ
ラ学園であつた。この学校はザクセン選定候の建てたものであつて、そこでは衣食住が無料であつた。彼はこの学
校に一七四一年から五年間在学した。コウルリッジがクライスツ・ホスピタルで古典を勉強したように、レッシン
グもここでギリシア語・ラテン語を学び、さらにフランス語・イタリア語などのほか、哲学や宗教を学んだ。授業
時間が終つて自由な時間になると、アナクレオンその他の古典詩人たちの作品を貧るように読んでいた。そしてと
きどき、氣に入つた詩をドイツ語に翻訳したりしていた。

律儀者の子沢山といわれているが、コウルリッジが貧しい牧師の一四番目の子として生れたし、レッシングもま
た、貧乏教師の二人中の長男として生れたので、親からの経済的援助は二人ともあてにできなかった。したがつ
てキリスト教を背景とする慈善学校は、彼等にとっては有難いものであつた。そして、二人とも、本来は牧師にな
るコースを歩むはずであつた。

マイセンの聖アフラ学園でのレッシングの成績はめざましいものであつた。彼は幼い頃から読書が大好きで、記
憶力のいい抜群な頭脳をもつた子であつた。一二歳でマイセン聖アフラ学園に入つてからは、ますます知識欲が旺
盛になり、校長が「この子は二倍の餌が必要な馬のようだ」と評したという。彼はこの学校に在るうちに、すでに

ラテン語の詩に興味を覚え、ギリシア語の詩を翻訳したりしていた。とりわけアナクレオンには強い関心をもってその詩を訳出した。コウルリッジがアナクレオンを做って詩を書いていたことも、同様の学問的背景から生じたものと考えられよう。

一七四六年、レッシングはライプツヒヒ大学に入学した。一七歳のときのことである。大学では神学と哲学を中心に学んだ。もちろん牧師としての準備のためである。しかし、彼の興味は神学よりは他のものにあった。このころ、化学・植物学などの講義を受講したり、文学や演劇に深い関心をもつようになった。一七四七年には雑誌に詩や小説を発表するまでに関心が文学的方面に高まっていた。そして一七四八年の復活祭から、医学の短期コースで勉強した。そしてその年にさらにヴィッテンベルクに行つて、医学の勉強を継続することとなった。この一七四八年に、彼は『青年学者』を書いた。これはレッシングの最初の喜劇である。このころ、ノイバーの劇団と交渉をもつようになり、それが軽い喜劇などを書く機縁となった。彼はこの年に、今度はベルリンへ移った。それは『青年学者』などの喜劇を上演してくれた劇団が破産したことも一因であるらしい。これから以後は、ベルリンが彼の主たる活躍の舞台となったが、それでもあちこちへ移住することがよくあった。このように、大学で神学を学ぶようにお膳立てされていたにも拘らず、自分の興味の趣きままにあちこちを彷徨して、好きな文学の道を歩むようになることも、まったくコウルリッジの場合と同じである。

一七五一年に、彼はヴィッテンベルクへ行つた。この大学で学位を取るためである。ここには一年ほどしか滞在しなかつたけれど、彼はここで宗敎史や古代文化を研究した。それがまた彼の知的背景を深いものにした。その間に彼は、初めての詩集『小詩集』クラインニッヒカイトンを刊行した。二二歳のときのことだった。コウルリッジは二四歳のときに最初の詩集を出版している。

一七五二年にベルリンへ戻つたレッシングは、フリードリッヒ・クリストフ・ニコライ、モーゼス・メンデルスゾーン、エヴァルト・フォン・クライストなどの、当時の文筆家や哲学者や詩人たちと親交を深めることとなった。このことが彼のその後の人生に大きな影響をもつこととなる。思えば、コウルリッジが二二・三歳ごろ知り合つた

サウジー、ワーズワース、プー、ウェッジウッド、コットル、デイヴィなどの人々が、彼のそれからの人生にどのくらい大きな影響を与えたか、またどのくらい彼の役に立ったかを考えると、青年時代に親しい友人をもつことの大切さが、この二人の実例から理解できよう。

ベルリンに戻ったレッシングは、詩や戯曲のほかに小説や批評や翻訳など、さまざまな文筆活動をした。彼はヴォルテールやディドロなどの著作を翻訳したり、やがてニコライやメンデルスゾーン等と共に雑誌『文学書簡』を創刊して批評活動を行なうようになったが、これらのことも、コウルリッジの青年時代と非常によく似た経緯を辿っているものといえよう。詩から演劇へ、そして批評活動へ、そしてさらに美学的・哲学的論及に発展していくことは、コウルリッジの場合でもそうであった。こうしたレッシングの生き方に、コウルリッジには共鳴するところが多かったのではないかと思われる。

四、レッシングの業績

コウルリッジはレッシングを知るに及んで、ますます彼に興味をもつようになっていった。それは単にレッシングが多面的な作家にとどまらず、当時の文学者に大きな影響を与えた深い思索家であり、近代的な感覚をもつ文化人であったからであろう。先に述べた個人的境遇の類似性に加えて、古典の深い教養に基づいた演劇観も、コウルリッジにはレッシングの魅力の一つであったことであろう。

コウルリッジは一八一一年ごろの『備忘録』で、シェイクスピアの初期の喜劇に触れ、レッシングの初期の喜劇が大学で取り扱われ、その劇の出来事も登場人物も、アカデミックな研究において考えられていると記しているが、実際にレッシングの演劇は近代演劇の名にふさわしいものである。

レッシングは一七五四年に『演劇叢書』を刊行して、それまでゴッドシェッドが主導していたフランス演劇追従に批判の目を注ぎ、国や時代によらず優れた作品を広く吸収し、評価することを提唱した。そして彼自身もそれを実行して、ドイツ演劇界に新風を吹き込んだのである。一七五五年に書かれた『サラ・サンブソン嬢』は、オーピ

ツ以来のドイツの演劇的伝統を破って、主人公として、これまでの英雄や王侯ではなく市井の一市民を登場させた初の市民劇であった。これはフランスではなくイギリスに範をとったものであった。この劇は純真な娘サラの悲劇を描いたものであった。しかもこれまでの習慣を破って散文で書かれたこの劇は、フランクフルトで初演と同時に大成功を収めたのであった。この劇の上演によって、ドイツ市民劇は着実にその歩を築いていったと考えられている。

コウルリッジも、この期におけるレッシングの功績を理解していたことは、『文学評伝』第三章に見られる次の記述から明らかである。

レッシングが活躍した時代には、ドイツの演劇はいわばフランス演劇の単調で自主性のない模倣に過ぎなかったように思われる。シェイクスピアの名とその作品を初めてドイツ人に紹介して驚嘆せしめたのはレッシングである。すべての思慮深い人々に、さらにシェイクスピアをもつイギリス人に対しても、シェイクスピアの作品のもつ明白な超法則性の真の本質を実証したのはレッシングであるというところを、過言ではあるまい。彼が実証したところでは、シェイクスピアの作品のもつ超法則性とは、ギリシア悲劇の偶然性からの逸脱に過ぎない。つまり、ギリシアの詩人たちの翼に重くのしかかっていて英雄歌劇とでもよべるようなものの範囲内にしか飛ぶことが限られていたような、偶然性からの逸脱である。⁽²³⁾

コウルリッジが述べているように、シェイクスピアを真に理解して、それをドイツ演劇の範としたのはレッシングである。それまでのシェイクスピアの評価は、イギリス国内でも芳しいものではなかったが、それを外国人であるレッシングが正しく捉えて、シェイクスピア演劇の良さを示したのであるから、その功績は非常に大なるものがある。レッシングのこの考え方は、前期ロマン派に属するアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルに受け継がれた。シュレーゲルがベルリンで行なった講演をもとに出版された『演劇および文学に関する講演』の中でシェイクスピ

アに大分多くのページを割いて取り扱っているけれど、これはレッシングにその原点がある。ヴィルヘルム・シュレーゲルは一七編のシェイクスピア劇を翻訳し、のちにテイクの監修のもとにヴィルヘルムの娘ドロテアたちが全訳を完成して、ドイツに不朽のシェイクスピアを残し、ドイツ人たちが「我々のシェイクスピア」として称えられた。しかしこれらのことは、思えばレッシングの偉業に依るところが大きい。

こう考えてくると、後年、コウルリッジとシュレーゲルの間で起こった剽窃問題は、その解決の糸口をレッシングに求めることができよう。コウルリッジもシュレーゲルも、共にレッシングからシェイクスピアについての考え方を学んだのである。

彼は晩年になってもレッシングの文体を絶賛している。一八三三年二月一六日の『食卓談話』でドイツ文学に言及し、こう述べている。

バラッドと軽い抒情詩では、ゲーテのものがもっとも優れているが、この点に関して彼をそれほど高く評価することはできない。私は彼の散文作品では『ヴィルヘルム・マイスター』が一番好きである。しかし、シラーの散文文体もゲーテの散文文体もレッシングのものには及ばない。レッシングの文体は、作風としてはまったく完全だ。⁽²⁴⁾

コウルリッジはレッシングの文体が最高だというが、それは彼がこの作家に限りない憧憬と敬意を抱いていたことも一因であろう。

また、一八三四年六月二四日の『食卓談話』で、コウルリッジは「レッシングは無韻詩について最良の考えをもっている」と評している。⁽²⁵⁾

レッシングは寓話を書いているが、コウルリッジはドイツで早速これを買って読んで読んでいる。レッシングの著作ならば何でも読もうとしたのである。後に彼は、三〇巻本の全集を手に入れたらしい。ドイツ滞在中に、彼はレッシングの全集を、この地の図書館で読めたし、いつでも利用できたらしい。コウルリッジが利用したのは、一七

七一年から一八二五年にかけて出版されたニコライ編の全集の一部であったといふ。⁽²⁶⁾

レッシングは戯曲や詩を作り評論活動をすると共に、一方で美学や演劇理論に深い洞察を示した。そうした作品の一つ『ラオコーン』では、古代ギリシアの有名な彫刻を題材に美学論を展開している。彼はここで、造形美術が一定の空間における対称を表わすのに対して、文学は時間の継続のうちに表わされるものであると考えた。これはヴィンケルマンの古代美術の特長として捉えた高尚な素材さと静かな偉大さとを重要視する立場を批判したものであって、古代美術の特長は芸術そのものの機能に由来するという彼の立場を示したものである。この『ラオコーン』は、文学と美学との関係を時間と空間の概念から説明したもので、カントの批判哲学の書物が現われる以前に書かれたものであるから、カントやシラーにも影響を与えていると思われる。

この『ラオコーン』は一七六六年に書かれたが、その翌年から三年間のうちに、それを継承した形で書かれた『ハンブルク演劇論』は、レッシングの傑作といつてよい。彼は一七六七年にドイツ初の国民劇場が建てられて顧問として招かれたのを機会にこれを書きはじめたのだが、この国民劇場は経営がうまくいかずに二年後に閉鎖となった。しかし彼が書き上げたこの演劇論は、同時代および後世の文人や戯曲家たちに大きな影響を与えた。ここで彼が主張していることのうち、もっとも重要なことは、アリストテレスの『詩学』の誤った解釈から生じた三一致の法則を劇に適用することを斥け、すでにそれを行なっているシェイクスピアこそ、近代演劇の模範とすべきものであるという論点である。彼はこうして、ラシーヌやコルネイユに代表されるフランス古典劇を追従しようとする当時のドイツの風潮に真向から対立したのであった。そして、演劇の観客は恐怖と哀感を劇を通じて感じ取ることを重要だといふ。観劇者は共感をもつことで自己の感情を浄化するために劇を観るのであるとレッシングは主張する。

レッシングのこうした演劇理論は、若きシラーに受けつがれ、シラーの『群盗』を読んでコウルリッジが戯曲を書き、ドイツにはやる心を駆り立てられたのであるから、レッシングの演劇上の存在は非常に大きなものがある。

五、レッシングの影響

コウルリッジはレッシングの著作からさまざまな影響を受けたけれど、戯曲の理論には相当な関心があったようである。当時のコウルリッジが自ら戯曲を書いて上演の機会を求めていたと思われるからである。一七九七年に書かれた『オソリオ』は、コウルリッジの二つ目の演劇であるが、これはやがて一八一三年に改作され、『悔恨』と名づけられた。すでに述べたように、コウルリッジのレッシングへの関心は、渡独した一七九八年からしばらくの間盛んであったが、『友』を出した一八〇九年以降にも高まった。そして『文学評伝』の出版で最高の時代に達したように思われる。レッシングへの関心は『食卓談話』に見られるように晩年まで続いたけれど、『備忘録』や書簡に残された記録からは、このような二つの関心の深い時期を考えることができる。『悔恨』が上演されたのはその後の時期であり、これはドゥルアリ・レイン劇場で好評を博した。コウルリッジの最後の戯曲『ザボリア』は、『文学評伝』出版の一八一七年に世に出たのであった。この後者の時期はシェイクスピアに関する講演をした時期でもある。この講演は、その一部がすでに一八〇八年に行なわれたらしいが、その原稿は残っていない。しかし、一八一一年から一二年にかけて行なわれた原稿は半分以上が残っているので、われわれはシェイクスピアに関する彼の見解をシェイクスピア批評という形で読むことができる。シェイクスピアに関する講演は一八一三年から一四年にかけても行なわれ、さらに一八一八年にも行なわれた。つまりこれは、彼がレッシングに強い関心をもっていた時期でもある。このことは逆に、シェイクスピアに関する講演をするともに、コウルリッジがレッシングの見解を参考にしたからであるとも考えられる。『シェイクスピア批評』の編者レイサーは、コウルリッジとレッシングとの関係はたいへん漠然としており、コウルリッジのレッシングに対する賞賛やシェイクスピア批評における彼の業績から、研究者はレッシングの影響を過大評価していると述べているが、やはり過少評価も無視するわけにもいかないであろう。

コウルリッジが一八〇〇年ごろに記した『備忘録』の記録には、『ハンブルク演劇論』の概要が残っている。⁽²⁸⁾ 彼

はレッシングの理論を書き留めて参考にしたのである。

コウルリッジはドイツから帰国後、歴史劇『忠誠の勝利』を書き出した。しかしこれは一八〇〇年の秋に未完のまま放置され、後にその抜粋が「夜の情景——戯曲の断片」として『シベルの詩片』（一八一七年）に載せられた。『備忘録』に残る記録から、コウルリッジがレッシングの影響のもとに、スペインを舞台とする戯曲を考えていたことがわかる。⁽²⁹⁾彼はレッシングの演劇理論を採り入れて戯曲を作ろうとしたのであろう。

コウルリッジはレッシングの言葉を随所で引用している。『備忘録』の三四一五には「幸福は、それが選ぶどんな状態からも偉大な精神を生じさせる……」⁽³¹⁾というレッシングの言葉を記している⁽³⁰⁾、その他、『備忘録』のあちこちにレッシングの言葉の引用がある。さらに、大英博物館で残っているコウルリッジが使ったレッシングの全集には、彼の欄外書き込みが多数あって、レッシングの思想を彼が吸収し、批判していた様子が伺える。⁽³²⁾

『文学評伝』二二章に記されたダヴィナントがホップスに宛てた手紙の引用は、そのまま『ハンブルク演劇論』からの引用であるという。⁽³³⁾

しかしながら、先に述べたように、レッシングがコウルリッジに与えた影響のうちで、もっとも注目すべきものの一つはやはりシェイクスピアの再発見である。本国のイギリスよりも大陸のドイツでシェイクスピアが再評価され、それがやがてドイツにシェイクスピアの名訳を生み、シェイクスピアが世界に知られるべきがけとなったからである。

コウルリッジは、一七九九年にレッシングの『名前』^{ドイツ語}という詩を訳している。これは一二行の短い詩である。

楽しい日に 恋人にこう訊いた。

どんな歌で あなたの名を呼んだらいい？

ローマやギリシアの どんな素敵な名で。

ララゲ、ネアエラ、クロリス、

サフォー、レスビア それともドリス、
アレトゥサ、それともルクリースはどう。

「ええ、」と優しい人は答えた、

「あなた、名まえはどれも空気の響きでしょう？」

どれでも 好きなのを選んでちょうだい。

サフォーでも クロリスでもいいわ、

ララゲとも ドリスとも呼んで。

ただ私を あなたのものと呼ぶだけでいいの⁽³⁴⁾」。

たわいのない詩であるが、ドイツ語の原詩のもつ音韻上の優美さを損わず、よく訳出されている。詳細な語句の面では若干の変化はあるが、全体的な詩の雰囲気はよく伝えられている。コウルリッジはこの訳詩を、『モーニング・ポスト』に載せたのであった。これは帰国後のコウルリッジが、レッシングに傾倒している一面を窺わせるものであろう。

六、む す び

コウルリッジはレッシングを知るに及んで、単にドイツ文学上の啓蒙期の一劇作家にとどまらず、理論家・思想家および批評家としてのレッシングをも考えた。そして、コウルリッジ自身の文学活動に、レッシングの見解を吸収し、批判し、そしてあるときはそれを模倣して、自己の精神のうちにレッシングをいわば栄養として、知的に成長していったのであった。

コウルリッジがレッシングにもっとも興味をもった時期は二回ほどあったけれど、総じてレッシングへの関心は、

終生衰えなかつたようである。彼は一八三三年一〇月二九日付のブラーティ宛の手紙で、自分が所有しているレッスングの全集を返却してくれたかどうかを問い合わせるところから、このころにもレッスングの著作を読むことに関心があつたことがわかる。

オックスフォード版『文学評伝』の編者ショウクロスは、精神的修養の面からも批評方法の訓練の面からも、レッスングについての研究は大きな価値をもつたと述べ、さらに、ポイヤー先生が始めた仕事をレッスングが完遂したとも述べているが、コウルリッジに及ぼしたレッスングの影響を過少評価してはならないと思う。コウルリッジはレッスングを知ることにより、知的に一回りも二回りも大きくなったといえよう。

注

- (1) *CL*, I, 197.
- (2) *Ibid.*, I, 437.
- (3) *Friend (CC)*, II, 215.
- (4) *BL*, II, 156.
- (5) *Ibid.*, I, 197.
- (6) *Ibid.*, II, 176.
- (7) *CL*, I, 516.
- (8) *CN*, I, 447.
- (9) *Ibid.*, I, 447n.
- (10) *Ibid.*, I, 450.
- (11) *CL*, I, 523.
- (12) *Ibid.*, I, 455.
- (13) *CN*, I, 377.
- (14) *Ibid.*, I, 377n.
- (15) *CL*, I, 480.

- (19) *Ibid.*, I, 481.
 (17) *Ibid.*, I, 518.
 (18) *Ibid.*, I, 519.
 (16) *Ibid.*, I, 552-553.
 (20) *Ibid.*, I, 611-612.
 (12) *Ibid.*, I, 632.
 (21) *Ibid.*, IV, 664.
 (22) *BL*, II, 182.
 (23) *TT*, p. 210.
 (24) *Ibid.*, I, 305.
 (25) *CN*, I, 337 & n.
 (26) *SMC*, I, xxiii.
 (27) *CN*, I, 869 & n.
 (28) *Ibid.*, I, 871 & n. / *Ibid.*, II, 2589 & n.
 (29) *Ibid.*, III, 3415 & n.
 (15) *Ibid.*, III, 4113 & n, 4139 & n, 4255 & n, etc.
 (30) *C & S*, p. 65n.
 (33) *BL*, II, 101, 288.
 (34) *PW*, I, 318 (II, 1130).

著書の略称はプリンストン版コウルリッジ全集の用法に準拠する。